

浦賀湊を見たジョン・セーリス

石川 秀幸

この人の名前が『横須賀人物往来』32ページにある。安池尋幸先生が書いている。彼は1579年にイギリスで生れ、東インド会社に入り、東洋貿易に情熱を燃やした。

日本との出会いは西暦1611年（慶長十六年）、東インド会社の商船艦隊の総指揮官になったことに始まる。翌年一月ジャワで、日本から送られたウィリアム・アダムスの手紙を読み、日本行きを決意した。目的は貿易開始のことである。

慶長十七年（1612）六月、九州の平戸でアダムスと対面した。アダムスはこの時、家康の住む駿府城からやって来たのだ。セーリスを家康に拝謁する段取りを、アダムスが行っていることから考えて、家康の命令で派遣されたのであろう。セーリスはアダムスに会うと、日本にイギリス商館を設置すれば、貿易拡大の見込みはあるかと聞いた。アダムスは諸外国が日本で、貿易している同程度は見込めると断言した。その時のアダムスの様子はセーリスによれば、同じ外国の同胞であるに拘らず、日本に大変愛着を持っていたと、セーリスは奇異に感じられたようだ。

九月八日、駿府城で家康に拝謁したセーリスはアダムスと共に、家康の側近の本多正純と向井政綱に引き合わされた。アダムスが外交顧問とすれば、本多は政治ブレーン、向井は海軍提督というところか。この会談の結果、セーリスは日本での貿易特権を認められ、自己の目的は達成されたのも同然であった。

江戸で二代将軍秀忠に会った後、九月廿一日、船で浦賀にやって来たセーリスは、数日滞在の間に、ここでアダムス夫人に対面したり、買い物をもした。浦賀湊を見たセーリスは、「ここはロンドンのテムズ河口のようだ」、と感想を記す。そして「船舶を安全に係留することが可能だ。江戸に近く平戸より条件は良いが、食糧は豊富ではない」と判断し商館は置かなかつた。江戸幕府が開かれて間もない頃なので、江戸や浦賀が十分に繁栄していなかつた、という見方をする。

この年の暮れ、平戸から帰国の途についたセーリスは1614年（慶長十九年）イギリスに到着した。其の後、日本の土を踏むことは無かつた。二十年後の1634年（寛永十一年）十二月十一日、生涯を閉じた。59歳か。

出光美術館蔵の『江戸名所図屏風』が向井将監家で描かせたものを見た。江戸城に天守閣が描かれた慶安三年（1650）頃の成立という。また本多上野介正純が向井将監に充てた書状に浦賀のことを浦川と書いてある。浦賀の地名は後北条氏の時代に浦賀と書いてあるものが初見文書である。浦賀という地名が、本多正純の文書のころだけ浦川と書いてある。

しかし「宇都宮騒動」によれば本多正純は、元和八年（1622）将軍秀忠の勘気を蒙り、出羽由利のちに横手に配流された。